

Discussion Paper Series A No.554

タジキスタンのジェンダー状況
――タジク女性の声：タジキスタンマイクロサーベイより――

五十嵐徳子（天理大学国際学部）
雲 和広（一橋大学経済研究所）

2011年10月

Institute of Economic Research
Hitotsubashi University
Kunitachi, Tokyo, 186-8603 Japan

タジキスタンのジェンダー状況*

—タジク女性の声:タジキスタンマイクロサーベイより—

五十嵐徳子⁺・雲和広⁺⁺

1. はじめに

ソ連邦解体から 20 年になろうとし、旧ソ連を構成した共和国も独立国家としてそれぞれの道を歩んでいる。そうした中、旧ソ連の地域のジェンダーの状況は様々な様相を見せていると考えられる。本研究は中央アジアの 1 構成共和国であったタジキスタンのジェンダーの状況について、その特徴と今後の展望に関し、現地における小規模なサンプリングによるインタビュー調査の結果と、国連児童基金 (UNICEF) による大規模サーベイデータとをもとに検討を試みるものである。

1.1 問題の設定

タジキスタンにおいて、大規模な国際移民が生じていることは広く知られる。2008 年には、その受入外国送金の規模は対 GDP 比で 50% 近くに達し、その比率は世界で最も高いものとなっている (雲, 2011)。ソ連解体後の旧連邦構成共和国におけるジェンダー状況の多様化を見る上で、イスラム圏の規範が強くと見られると想定され、しかし家計内において男性が欠けるという状況が広範に発生しているタジキスタンの女性の位置の動態は、国際労働移民が多く見られる中央アジアを中心とした旧ソ連諸国のジェンダー状況を考察する上で示唆を与え得るものと考えられる。

現在のタジキスタンにおけるジェンダーの状況について分析するために本研究では、多数の成人女性がフルタイムで働く経験をもつタジキスタンにおけるワーク・ライフ・バランス実現の可能性、ジェンダーの状況と民族的ファクターとの関連に関心をおきながら、今後想定される動向にも触れる。

1.2 調査の概要

本研究の枠内で、筆者らはタジキスタンの女性に対してジェンダーに関する聞き取り調査を行った。タジキスタン、そして旧ソ連諸国であるカザフスタン・キルギス・グルジア・ウクライナ等に関する

* 本研究は平成 22 年度一橋大学経済研究所共同利用共同研究拠点プロジェクト研究「ロシア・CIS におけるジェンダー状況と家計の居住環境・出生行動のマイクロデータ分析」(研究代表:五十嵐徳子)による成果の一部である。

⁺ 天理大学国際学部准教授。E-mail: i-noriko0604@nifty.com

⁺⁺ 一橋大学経済研究所准教授。E-mail: kumo@ier.hit-u.ac.jp

大規模な家計調査・女性調査は世界銀行及び UNICEF が実施しており、そのデータは十分利用可能なものとなっている¹。それらは本研究でも利用し追って言及するが、今回我々が意図したのは、大規模マイクロデータによる検討を補完するような、そして大規模データでは埋没してしまう恐れのあるリアリティを掴み得るような記述的・社会学的調査であった。

本サーベイは2010年6月～8月にかけて実施した。五十嵐が2010年5月にアンケート調査票素案を作成し、Sergei Ryazantsev ロシア科学アカデミー社会政策研究所教授及び雲との議論を通じてその修正を行った調査票決定版を2010年6月に完成させた。雲と五十嵐が Ryazantsev 教授を介して、モスクワに20年以上在住しているタジク人である同研究所の Akramov 博士候補並びにタジキスタン国立フジャンド大学 Azimov 教授に調査を依頼した。調査を実施したのは Akramov 博士候補及び Azimov 教授、Azimov 教授の指導するタジキスタン国立フジャンド大学大学院生(女性)、そして五十嵐並びに雲である。

被験者数は40名である。うちタジキスタン・ドウシャンベにて12名(30%)、タジキスタン・フジャンドにて28名(70%)に対する聞き取りを行った。フジャンド内被験者の地区別内訳は、Bobodzhon gafur 地区4名、Spitamen 地区3名、Dzhabbor Rasul 地区2名、Kanibodam 地区5名、Isfar 地区3名、Asht 地区5名、Rudak 地区3名、Istaravshan 地区1名そして Ganchin 地区2名、で合計28名となる。農村地域での被験者数は28名で、70%を構成する。この構成比はタジキスタン全体の農村人口比率に近い値である。

タジキスタンから大量に生じているロシアへの労働移民を背景に、それが家計内の分業関係に何らかの影響を与えている可能性を探るということを鑑み、被験者のグループは下記の通りを選び出した。有意抽出であり、標本の代表性は担保されないことに留意する必要がある。対象者は以下の通りである。

- i. 自身はこれまでに1度も海外で働いたことがなく、その夫は現在あるいは2009年6月以降に1ヶ月以上海外で働いたことがある、という女性。14名。(35%)
- ii. 自身はこれまでに1度も海外で働いたことがなく、その夫も一度も海外で働いたことがない、という女性。13人。(32.5%)
- iii. 自身が現在あるいは2009年6月以降に1ヶ月以上海外で働いたことがあり、その夫も現在あるいは2009年6月以降に1ヶ月以上海外で働いたことがある、という女性。6人。(15%)
- iv. 自身が現在あるいは2009年6月以降に1ヶ月以上海外で働いたことがあり、その夫は一度も海外で働いたことがない、という女性。3人。(7.5%)
- v. 離婚した女性あるいは未亡人。4人。(10%)

被験者の年齢について言及しておく、30歳未満が19人で47.5%を構成する。30歳以上が21人で52.5%を構成している。

また現状把握を客観化することを目的として、40名の被験者以外に、地域の(Jamoat)役所にお

¹ *Basic Information Document: Tajikistan Living Standards Measurement Survey 2007*, World Bank, July 2008 や *Tajikistan Living Standards Survey 2009: Notes for Users*, World Bank, May 2010, 並びに UNICEF Website 内 http://www.childinfo.org/mics3_surveys.html 等を参照。

けるジェンダー問題担当職員・イデオロギー担当職員、タジキスタン教育アカデミー総裁並びに同職員、タジキスタン共和国労働社会保健省第1副大臣・分析部長、シンクタンク「シャーク」研究員など、専門家・実務家らへの聞き取り調査も行った。

2. 社会的分業・家庭内分業の変容とタジク女性の意識

ソ連では、家計内において複数の稼得者が存在する状況が一般的であった。即ち、夫婦共に働いているという形が広く見られていたことがよく知られる。しかしながらソ連を構成していたタジク共和国では、イスラム規範の浸透の強さ或いは家庭外における就労機会の不足によるものであるか、他と比較し女性の有業者比率は低い状態を維持していた。それがソ連崩壊後、2000年以降において女性の有業者比率が上昇していることが示される。またその背景に、女性の家庭内分業に関する意識と職業観とに見られる「ゆらぎ」を指摘することが出来よう。

2.1 女性就業について

ロシア革命以前は中央アジアでの女性の就業はほとんどみられなかったが、その後ソビエト時代には就業率は上昇した。とはいえ例えば、ウズベキスタンでは、1970年代、女性の就業率が低く、熟練を要する職につくのはスラブ系の女性で、現地の女性は未熟練の職につくことが多かったとされる²。この状況はタジキスタンでも同様であったと思われる。

表1 全就業者に占める女性の割合(%)

| 国/年 | 1940 | 1945 | 1950 | 1960 | 1970 | 1980 | 1990 | 1995 | 2000 | 2005 | 2006 | 2007 | 2008 | 2009 |
|---------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| ソ連 | 39 | 56 | 47 | 47 | 51 | 51 | 51 | - | - | - | - | - | - | - |
| ロシア | 41 | 59 | 50 | 50 | 53 | 53 | 52 | 48 | 48 | 49 | 49 | 49 | 48 | 49 |
| ウズベキスタン | 31 | 49 | 40 | 39 | 41 | 41 | 43 | 43 | 44 | 48 | 49 | 49 | 49 | 49 |
| カザフスタン | 30 | 51 | 40 | 38 | 47 | 49 | 49 | 47 | 48 | 48 | 48 | 49 | 49 | 49 |
| タジキスタン | 29 | 48 | 39 | 37 | 38 | 39 | 39 | 41 | 46 | 46 | 46 | | | |

出所：Rockney (1991); Содружество независимых государств в 1996 году (1997); Содружество независимых государств в 2003 году (2004); Содружество независимых государств 2009 (2010) より筆者作成。

表1は旧ソ連諸国の1940年から直近時点までの全就業者の中で女性が占める割合を示している。タジキスタンの女性の就業状況を理解するために、ロシア及び中央アジアにあるウズベキスタン、カザフスタンのデータも提示した。これによると、1940年の統計では、女性の就業者は、タジキスタンのみが3割未満であり、その他は3割以上4割強である。しかし、第2次世界大戦によって男性

² Lubin (1981), pp.183-186.

の人口が減り、代わって女性が社会進出すると、以後女性の就業率は上昇した。1950年代、ロシアをはじめとするヨーロッパ部に位置する構成共和国では、女性の就業率は5割強で推移していた。他方中央アジアでは、スラブ民族の割合が高いカザフスタン、キルギスでは5割弱であったが、タジキスタンでは、4割を超えることはほとんどなかった。

ソ連解体後になると、ロシアでは1991年を境に男女の割合が逆転し、それまで男性を上回っていた女性比率が5割を切った。それに対し、タジキスタンやウズベキスタンの女性就業率は上昇したのである。

ソ連時代には、ムスリム系民族の女性が多産であったことは人口センサスから明らかである。また anecdotal に言われることとして、家父長的な因習が残存しているため、女性の社会進出が困難であったとされる³。そのため女性の就業率は他の構成共和国に比べて低かったということが十分に考えられるであろう。しかし、ソ連邦の解体後、特に1990年代後半から女性の就業率は上昇し、中央アジア諸国においてもロシアなどと比較可能な水準になったのである。

このことが現地におけるジェンダーの状況に大きな変化をもたらしているということは、聞き取り調査からも示すことが出来る。本調査では、40人中31人が仕事をしている(77.5%)。2000年代末に至り、ロシアなどへの出稼ぎ女性労働者もタジキスタンでは増加していることが指摘されている。本調査では、被験者抽出時には、22.5%が外国へ出稼ぎに行ったことのある女性であったが、調査票でそのことが確認出来たのは12.5%であった。とはいえこの数字でも、ムスリム女性の一般的な就業率の低さを鑑みれば、極めて高いものと見る事が出来るであろう⁴。

昨今の女性就業率の高さは、タジキスタンの経済状況に関係しているものと思われる。タジキスタンからロシアなどへの出稼ぎが影響を与えている可能性を鑑みる必要がある⁵。

マイクロデータ及びマクロデータの双方を勘案するに、2009年、タジキスタンから外国へ出稼ぎに行く人は50万人を僅かに下回る規模で、そのうち90%以上が男性である(雲, 2011; World Bank, 2009)。彼らの80%以上は本国に送金をしている。もちろんこの送金だけで十分に生活できる家庭もあるであろうし、残された家族も共に働かないと生活が困難な家庭もあるであろう⁶。また、送金が途絶え、女性も働かざるを得なくなる状況もある。夫が反対するために外で仕事をする事ができなかった女性も、夫の出稼ぎで夫が不在となり、そのことにより自由になり、家庭の外で仕事をするようになったのではないかと予想することも不可能ではない。このことが女性の就業状況にどのような影響を与えるか、という点が興味を引く。サーベイでは女性の自立と仕事について尋ねた。

³ Lubin (1981).

⁴ 黒崎 (2006).

⁵ 2010年8月18日、タジキスタン共和国労働社会保障省第1副大臣 Sanginov氏は「ロシアの民警は男性のタジク人に対して非常に酷な振る舞いをする一方女性に対してそうしたことを控えるので、このところ女性の方がしばしば移動しロシアで働くというパターンが見られる。またレストラン等の仕事は一年を通じて有るが、道路掃除や建設といった男性が従事する仕事はロシアでは季節に限られるという側面もある」と自身のオフィスで筆者に語った。

⁶ Темкина (2008), p.108.

2.2 タジク女性の仕事観

上に見た通りタジキスタンにおける女性の就業率は、2000年以降一貫して高い状態にある。2000年代末現在、経済的な圧力により働くことを余儀なくされた女性たちも、女性の就労そして経済的な潤いをもたらすことには肯定的な意見が見られる。

「女性が自立するためには、仕事をするのが1番でしょう。ちょっとした支出に使うお金をもてるわけですから」(ファイジニソ, 52歳, 専業主婦)

「働いている女性は良いなと思います。もし女性が働いているならば、他のものを必要としないし、誰かに依存することが無くなります。女性が自立するには働くことが最良の道だと思います。女性が働いていれば、どんな問題も自分で解決出来ます。今の時代、お金があれば何でも解決出来ますよ」(シャフノザ, 22歳, 販売員)。

「私は外では働いていません。以前は夫の仕事の手伝いをしていましたが、今うちで働いてお金を稼いでくるのは夫です。でも理想を言えば、夫婦2人とも働くべきだと思います。専門技術を持ち、家族を経済的に豊かにすることの出来る女性になりたいなと思います。女性にとって、自立するには働くことだと思います。お金を十分に得ることが出来るようになりますから」(マヒナ, 23歳, 専業主婦)。

「女性の自立には仕事を持つことが一番です。お金を稼いでいたら、自由が得られます」(チュマグル, 22歳, 縫製工)。

「一般的にも女性が自立するために仕事を持つことには賛成ですね。だって生活がかかっていますから」(マフブバ, 54歳, 大学教員)。

「女性が自立するためには、仕事を持つことにも賛成です。なぜなら、お金を稼ぐことで、自分の要求を満たすことができますから」(ガヴハロイ, 22歳, 専業主婦)。

「家族の生活状況を良くするためには、夫婦2人が働かないといけません」(シャホダト, 44歳, パン屋経営)。

「女性も仕事をしていると生き生きしますし、それに経済的に余裕ができます」(モヒラ, 30歳, 専業主婦)。

このように、「女性の自立は仕事を持つことによるものであり、それが経済的にも家族にとってもよ

いことである」とみなす女性は多数存在している。とはいえ他方、これに反対する女性もいる。彼女たちの意見を見てみる。

「『女性が自立するには仕事を持つことが最上の手段か』ですって？ 必ずしもそうは思いません。大切なのは、夫婦がお互いを理解しあうことだと思います」(ナブバホル, 29 歳, 専業主婦).

「女性が自立するには、働くことよりも夫婦の間でお互いを理解することのほうがより必要なのではないかと思います」(ザミラ, 28 歳, NGO通訳).

「仕事をするのが女性が自立する最善の道だとは思いません。そういう考えには賛成出来ません。良い主婦であれば、それを夫は評価してくれるのですから」(ラフォアト, 54 歳, 清掃婦).

「女性の自立のためには女性が仕事をするのがもっともよい方法だとは思いません。その自立とは経済的な自立だけをさすからです」(ムヤサル, 44 歳, 技術者).

上に見た通り、仕事をするのが女性の自立の手段だとは思わない女性もあり、「良い主婦であれば、それを夫は評価してくれる」というラフォアトのように、夫は自分を評価する側である、と見なすが如き家庭内の権力関係の存在が感じられる。これは後に見る、「夫は家庭の主である」という価値観のあらわれであるのかもしれない。

しかし、このような意見を持つ女性は少数であり、全体としては、現在自分が働いているか否かに関わらず、女性が自立するために働くことには異論を唱えていないようである。これは筆者の一人がウズベキスタンで行なったサーベイと同様の傾向を示している⁷。ウズベキスタン女性で自立のための仕事に反対する人は、35%であり、それ以外は「どちらとも言えない」あるいは「賛成」とする者であった。タジキスタンは旧ソ連共和国の中で比較すれば女性就業率が低かったとはいえ、ソ連時代にもある程度女性の就労が習慣化していたことの名残と見ることもできるのかもしれない⁸。またもう一つの理由としては、現在の経済状況を鑑みると働かざるを得ないから、ということも十分考えられる。

2.3 理想の女性像

以上のように、女性の自立のための仕事については概ね反対する人は少ない。しかしながら、仕事を持つことが女性の自立につながると見なしている女性でも、自立とはいえないと答えている

⁷ 五十嵐(2009).

⁸ 五十嵐(2009).

女性でも、夫が妻を養うべきであり、女性は専業主婦であることが良いといった、いわゆる「伝統的役割分担」を支持する人が多い⁹。

「私は専業主婦です。働いていません。夫が働いています。2人ともが働くのが良いように思いますけれども。でも、女性が務めるべき役割としては専業主婦が理想です。女性は家事をちゃんとこなさなくてはなりません」(ナブバホル, 29歳, 専業主婦)。

「歯医者として1日8時間働いています。我が家で主に稼いでいるのは、夫の父と夫です。一部、私の給料という部分もありますが。夫がお金を稼ぐべきだと思います。専業主婦であるような女性は良いと思います。なぜなら、女性の義務というのは、部屋を清潔にして、子供をしつけることだと考えているからです」(マリカ, 32歳, 歯医者)。

「私は働いています。縫製工です。週にすると48時間働いています。夫も私も働いていますが、本当を言えば夫が働くというのが理想です。専業主婦が良いと思います」(アジザ, 28歳, 縫製工)。

「私は専業主婦にあこがれます。専業主婦は、家庭の源ですからね。何よりも尊いです」(ムフタバル, 42歳, 勤務者)。

「私は専業主婦です。ですから夫が働いて、私は家事、育児をしています。理想の女性像は専業主婦です。私の子育てをして、子供たちに勉強させなければなりませんからね」(マジナ, 26歳, 専業主婦)。

マリカは、自分自身も1日フルタイムで歯医者として働いている高学歴女性であるが、それでも「我が家で主に稼いでいるのは夫と夫の父です」といった言葉が出てくるのである。ここではやはり、主に働くのは男であるという価値観が根付いているのではないかと推測することが可能である。

専業主婦を理想とする女性と同じくらい、実務的な女性や仕事のプロにあこがれる女性も存在している。これらの声を聞くと、タジクの女性達は、その就業に関して2つの価値観の中で揺れているのではないかと思われる¹⁰。以下に専業主婦以外の働く女性を理想とする女性の声を見る。

「ビジネスに従事して自由な生き方をしているような女性に親近感を覚えます。結婚も計画的にするような。というのも、私自身がそういう女ですから」(マスタ, 47歳, 公証人役場次長)。

⁹ Темкика (2008), p.116.

¹⁰ 最近のタジキスタンにおけるジェンダー研究の中でもしばしば、「ゆらぎ」の背景にある、いわゆる家父長的な傾向と、近代化の傾向の2つの傾向が見られると指摘されている(Темкика, 2008, p.107., Олимова, Кужжусов, 2007, С.38-39.)。

「私は仕事をてきぱきとこなすような女性に親しみを覚えます。そうした女性は、社会のために自分の知識を生かすことができます」(ザミラ, 28 歳, NGO通訳).

「私は専門技能を持つ女性に親しみを覚えます」(ザリナ, 30 歳, ホテル客室係り).

「専門技術を持ち、家庭を経済的に豊かにすることの出来る女性になりたいなと思います」(マヒナ, 23 歳, 専業主婦).

「実務をこなすような女性に親しみを覚えます。そういう女性は、家族のために経済的な潤いをもたらしてくれます」(マディバ, 25 歳, 技術者).

「私の理想の女性像は、実務的な女性です。なぜならば、自分の知識を使って家庭のためになり助けになるからです」(サレハ, 24 歳, 専業主婦).

「理想の女性とは訊かれれば、仕事をてきぱきとこなすような女性です。」(ムヤサル, 44 歳, 技術者).

先に言及した、筆者が以前実施したウズベキスタンにおける無作為抽出を旨とした調査¹¹では、ウズベク女性で専業主婦を理想の女性としている人は 32%で、67%が実務的な女性や仕事のプロといった女性を理想の女性像としていた。これと比較すると、タジキスタンでは専業主婦を理想のものとする女性が多いように思われる¹²。

2. 4 家庭か仕事か

「タジキスタンの女性は」と一般化する人も、「私個人は」と断る人もいるが、どちらにしても多くの女性が、タジキスタンの女性にとってあるいは個人にとっては家庭のほうが大切であると答えている。その理由として、「家庭が大切であるといった価値観の中で育てられたから」、あるいは「家庭が社会の核であるから」、「タジクの伝統や習慣であるから」、と説明する女性が多い¹³。家庭を大切にしながら仕事も続けると答えた女性も、仕事をするからには家庭のこともおろそかにしないということを述べている。まず、仕事より家庭が大切としている女性の意見を見る。

¹¹ 五十嵐 (2009), p.29.

¹² ウズベク女性では、学歴が低い人ほど専業主婦を選択するという傾向が見られた。タジク女性に関しても、学歴による回答傾向を詳細に分析することも必要であるが、これは今後の課題である。

¹³ タジキスタン女性の役割は次世代に民族の文化を伝えていくことである、という見解が指摘されている(Темжика, 2008, p.106.)。

「タジクの女性にとっては、仕事よりも家庭のほうが大切だと思います。なぜと言うに、それがタジクの習慣だと言うことではないでしょうか」(ディロヴァル, 31 歳, 技術者)。

「仕事と家庭とであれば、私にとって家庭のほうが大切です。私たちは未来の世代のために生きているのですから」(マヒナ, 23 歳, 専業主婦)。

「私にとって大切なのは、仕事よりも家庭です。だって、家事をしたり、子供を分別ある人間に育てたりすることは、人間に喜びをもたらしますから」(マディバ, 25 歳, 技術者)。

「私としては、仕事よりも家庭のほうが大切だと思っています。私自身、女性にとっては家庭が一番大切だと育てられました」(チュマグル, 22 歳, 縫製工)。

「タジクの女性にとっては仕事より家庭が大切だと思います。幸せはすべて家庭の幸福の中にあるからです」。(グルノラ, 42 歳, 教師)。

「タジクの女性にとっては仕事よりも家庭が大切です。私は家庭が一番大切であると育てられましたので、子供たちもそのような価値観を持つように育てたいです」(ガヴハロイ, 22 歳, 専業主婦)。

「タジクの女性にとっては、仕事よりも家庭のほうが大切だと思います。なぜならば家庭がみんなを平和に幸せにしてくれるからです」(サレハ, 24 歳, 専業主婦)。

「タジクの女性にとってと一般化することは難しいですが、私個人で言えば家庭が仕事より大切です。なぜならば、仕事は仕事です。十分に満たされた家庭を誰もが作れるわけではありません。女性の幸せは家庭の中にあります」(マヴズナ, 30 歳, 生産管理技師)。

「タジクの女性にとっては、仕事より家庭のほうが大切だと思います。家庭が社会を作っているといっても大げさではないと思いますから。タジクの女性なら誰でもいい家庭を築き、子供を持ちたいと夢見ています」(モヒラ, 30 歳, 専業主婦)。

仕事より家庭と答える女性が圧倒的に多く、どちらも大切であるとする者や返答に躊躇する女性は少ない。以下に、両方とも大切であるとした回答の例をあげる。

「タジクの女性にとっては家庭も仕事も両方大切だと思います。だって、家庭は生活の基盤ですし、仕事は経済的な基盤ですから」(マジナ, 26 歳, 専業主婦)。

「タジクの女性にとっては家庭も仕事も大切です。」(シャフノザ, 22 歳, 販売員).

「タジクの女性にとって家庭か仕事かどちらが大切かと聞かれても難しいですね. タジクの女性も様々だと思います. もし夫がよい仕事についていれば, 女性にとっては家庭がより大切でしょう. もしそうでなければ, 女性自身が働かなければなりません. また, 家庭と仕事を上手にこなしている女性もいます」(ムヤサル, 44 歳, 技術者).

タジキスタンでは, ウズベキスタンに比較して, 家庭か仕事かと聞かれて, 家庭を選択する人が圧倒的に多いものと見受けられる. 再度, 筆者の一人によるウズベク女性に関するサーベイでは, 「断然家庭・家庭」を選択した人は, 52%であり, 「どちらとも言えない」と「断然仕事・仕事」が合わせて 44%であった¹⁴. 先の, 理想の女性を尋ねたことについても, タジキスタンではウズベク女性に比べて専業主婦を選ぶ傾向が強いようであり, 中央アジアの中で比較してもいわゆる伝統的な価値観を持っている人が多いのではないかと考えられる.

3. ワーク・ライフ・バランス:タジキスタンの場合

女性に限定するものではなく, 労働と生活との調和すなわちワーク・ライフ・バランスを実現することが, 長期的にみた出生率の維持, また広く生き方そのものの多様性の拡大につながることは, 既に日本においても共通の認識が形成されつつあると言って良からう¹⁵. タジキスタンにおいてそれが実現しているとは想定し難いが, 実際にタジク女性はどのような認識を有しているのか, ワーク・ライフ・バランスに関連する側面を検討する.

3.1 家事労働負担の背景:電化製品の未普及

女性の就業率が高いことを鑑みれば, 女性の負担は小さくないであろうと思われる. そこでここではその負担の大きさを推し量るため, 女性の家事労働時間を間接的に示唆する指標と見なし得るであろう電化製品の普及率について, 他の旧共和国との比較しその現状を見る. 以下一連の表にあるように, タジキスタンは旧ソ連諸国の中でも電化製品の普及率が非常に低い.

ロシアでは, 連邦解体以前から 1 家に 1 台の冷蔵庫を有していたが, 連邦解体以後も, 普及率は上がり続けている(表2). 一方, タジキスタン, キルギスでは普及率は下がっているが, これはソ連崩壊後の急激な所得低下・その後の緩慢な回復により, 買い替えが進んでいないことを示すものと思われる.

¹⁴ 五十嵐(2009), p.28.

¹⁵ 内閣府, 『仕事と生活の調和(ワーク・ライフ・バランス)憲章』, 2007 年. (http://www8.cao.go.jp/wlb/government/20barrier_html/20html/charter.html)

ソ連時代には洗濯が家事の中で最も大変な仕事であると見なされていた¹⁶。筆者の一人が現地調査に着手するようになった1990年代初頭には、全自動の洗濯機を持っている家庭が非常に少なく、多くの人が洗濯を最も大変な家事の1つにあげていた¹⁷。ロシアでは、洗濯機は既に1世帯あたり1台の普及が見られる一方、タジキスタンではその普及率は非常に低く、2006-2007年で3%、2008年が4%、2009年でも5%となっているのである(表3)。

表2 冷蔵庫の普及(100世帯に対する台数)

| 国/年 | 1990 | 1995 | 2000 | 2005 | 2006 | 2007 | 2008 | 2009 |
|----------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| ロシア | 95 | 116 | 113 | 117 | 118 | 119 | 121 | 123 |
| アゼルバイジャン | 83 | 65 | 89 | 100 | 101 | 102 | 102 | 102 |
| キルギス | 82 | 48 | 33 | 31 | 32 | 32 | 32 | 33 |
| タジキスタン | 74 | 54 | 37 | 23 | 19 | 19 | 20 | 21 |
| アルメニア | 81 | | | 86 | 85 | 87 | 87 | 83 |

出所: Содружество независимых государств в 1996 году (1997); Содружество независимых государств в 2003 году (2004); Содружество независимых государств в 2009 году (2010)より筆者作成。

表3 洗濯機の普及(100世帯に対する台数)

| 国/年 | 1990 | 1995 | 2000 | 2005 | 2006 | 2007 | 2008 | 2009 |
|----------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| ロシア | 77 | 100 | 98 | 97 | 99 | 100 | 100 | 101 |
| アゼルバイジャン | 51 | 47 | 55 | 60 | 60 | 61 | 61 | 55 |
| キルギス | 86 | 76 | 58 | 49 | 50 | 50 | 50 | 51 |
| タジキスタン | 59 | 32 | 30 | 8 | 3 | 3 | 4 | 5 |
| アルメニア | 95 | | | 72 | 70 | 73 | 74 | 79 |

出所: Содружество независимых государств в 1996 году (1997); Содружество независимых государств в 2003 году (2004); Содружество независимых государств в 2009 году (2010)より筆者作成。

洗濯と並んで時間を要する家事である、清掃の負担を軽減する掃除機の普及状況を見てみよう。ロシアの最新のデータでは、100世帯あたり92台(2009年)の普及となっている。タジキスタンでは洗濯機と同様、その普及率は著しく低く、2009年のデータでは、100世帯あたり9台となっているのである(表4)。

2009年現在、冷蔵庫の普及率でさえ、タジキスタンでは極めて低く100世帯あたり21台となっている。洗濯機、掃除機に関しては、さらにその状況は悪い。タジク女性の負う家事労働の大きさを看取することが出来ると言えよう。

¹⁶ Вестник статистики, 1992, p.54

¹⁷ 五十嵐, 1998, pp.110-119.

表4 掃除機の普及(100世帯に対する台数)

| 国/年 | 1990 | 1995 | 2000 | 2005 | 2006 | 2007 | 2008 | 2009 |
|----------|------|------|------|------|------|------|------|------|
| ロシア | 51 | 77 | 82 | 84 | 87 | 88 | 89 | 92 |
| アゼルバイジャン | 34 | 28 | 36 | 47 | 48 | 50 | 53 | 55 |
| キルギス | 35 | 30 | 20 | 15 | 22 | 16 | 16 | 17 |
| タジキスタン | 22 | 28 | 8 | 5 | 5 | 6 | 8 | 9 |
| アルメニア | 51 | | | 36 | 37 | 41 | 43 | 57 |

出所: Содружество независимых государств в 1996 году (1997); Содружество независимых государств в 2003 году (2004); Содружество независимых государств в 2009 году (2010)より筆者作成.

3. 2 家事・育児は誰の仕事か

既に見たようにタジキスタンでは女性の就業率は高い。今回のサーベイ対象の女性については、40人中31人が仕事をしている。インタビューの中で、家事は誰がしているのか、育児は誰がしているのか、という点について尋ねている。その回答全体を見ると、息子夫婦と同居しているために嫁が家事をしている者や、離婚したために自分の両親が家事をしているといったケースは見られるが、それ以外の女性は家事を主に担っていることが如実に示される。そして家事は女性の仕事であり、「女性の第2の仕事であることは差別ではなく、むしろ家事は第1の仕事である」といった回答をする女性が多く見られた。

「今うちでは、全ての家事を私がしています。仕事の後にね。母は家事を手助けしてくれます。これは女性だけの仕事です。家事は女性の第2の仕事だとは思いません。「第1」の仕事です。でも今は女性も働かなくてはならないでしょう。自分の自由になるお金を得るために。

私は、子育ては妻の仕事だと考えています。私には子供はいませんが。家の中の仕事をどう分担すべきか、と言えば、妻は家事や子育てをしなければなりません。夫は仕事をして、家族を養わなければならないのです」。(シャフノザ, 22歳, 販売員)。

「買い物以外の家事は全て私がこなしています。1日4時間くらいかけています。家事の手助けは姑がやってくれます。家事も育児も、男性の仕事ではありません。女性の第2の仕事が家事だというよりも、そもそも女性は全てをうまくこなさなくてはならないと思います」(ザミラ, 28歳, NGO通訳)。

「家事をするのは主に私です。夫は2ヶ月に1回ほど帰国するといった調子です。家事は娘が手伝ってくれます。家事は女性の第2の仕事ですし、そういう考え方は別に差別だとは思いません。家事も子育ても、基本的に女性の果たすべき仕事で、夫は稼いできてく

れる人、というのがあるべき姿だと思います」(ラフォアト, 54 歳, 清掃婦).

「家の中の家事をするのは全て私です. 夫は, 買い物はしてくれますけれど. 子育ても私が自分でしました. 家事は女性の第 2 の仕事だという考え方に賛成です. それは差別ということではなく, 普通のことだと思っています」. (ラノ, 48 歳, コック).

「家事や育児にかかる時間はだいたい週に 36 時間くらいです. 家事が女性の第 2 の仕事であるということが差別だとは思いません. 女性はどこらにいても働くでしょう. 子育ては私がしていますが, 理想としては二人で子育てをすることですね」. (マジナ, 26 歳, 専業主婦)

「仕事の後, 食事を作り掃除をして洗濯をします. 夫は買い物をします. 夫が家事を手伝ってくれます. 家事が女性だけの仕事だとは思いません. しかし, 家事が女性だけの仕事だということが差別だとは思いません. 女性はすべてをこなせないといけませんから」. (シュルキヤ, 27 歳, 縫製工).

「私自身は姑と夫の弟の嫁と一緒に食事を作り, 洗濯をし, 掃除をし, 田畑を耕します. 家事は女性の仕事だというのは差別ではありません. 女性にとっては, 家事は, 第 1 の仕事です」(サレハ, 24 歳, 専業主婦).

「私は, 家にいるときはあらゆる家事をしています. みんな家事を手伝ってくれますが, 基本的には女性の仕事だと思います. どんな女性もまず主婦ですから, 家事が女性の第 2 の仕事だというのが差別だとは思いません. 家事, 育児に役割分担を決める必要はないと思います」. (ムヤサル, 51 歳, 幼稚園教諭)

1 人だけ, あまり家事に時間をかけないという女性がいた. そして家事育児は分担するものだ, と明言している.

「私は家事には余り時間をかけていません. 子供達が手伝ってくれています. 家事が女性の仕事だというのは差別だと思います. 家事も育児も, 夫婦は家庭のあらゆることに助け合うべきです」. (グルノラ, 42 歳, 教師).

また, 実際に家事は夫と分担している女性が 1 人だけいた.

「家事は夫と 2 人でしています. 理想もふたりですね. うちでは例えば夫は食料品を買ってきます. それに娘が手伝ってくれます. 家事は女性の第 2 の仕事であることは確かです

が、これが差別だとは思いません」(マフブバ, 54 歳, 大学教員)

しかし、マフブバは夫の家事分担について、「夫は食料品を買ってきます」と答えている。彼女は、「夫は買い物をして、それ以外は全て自分がしている」という状況を「役割分担している」と見なしているのではないかと考えられる。サーベイ全体の中で、夫が実際に従事している家事や夫の役割であると見なしている家事を「買い物」と答えている女性が多く見られることから、マフブバの意図している「分担」とは、全ての家事を分担するという意味ではないと推測される。従って、結局のところ全ての回答者が自ら家事を担っているという状況であるとも考えられるのである。

家事・育児を自ら担っていても、理想としては夫婦で分担し助けあえるべきだと考えている人も一定数存在している。とりわけ育児に関しては、夫婦で分担すべきものだと考えている女性が多い。まず、家事・育児を夫婦で分担するべきだと考えている女性の意見を見る。

「私自身が家事にかけている時間は1日4時間とか6時間とかです。家事は女性だけの仕事だとは思っていないのですが。子供たちは家事を手伝ってくれますよ。家事は女性の仕事だというのは差別だと思います。家事も育児も、妻と夫との間で半分ずつ分担すべきです。」(ディロヴァル, 31 歳, 技術者)。

「家事全般を私がやっています。1日5-6時間かけています。週にすれば35-40時間というところ。母が手助けしてくれます。夫は家畜の世話をします。『家事は女性の第2の仕事だ』という言い方は差別だと思います。男の人には判らないかも知れませんが。子供のしつけは主に私のすることです。夫は2カ所で働いていますから。子育ても家事も、理想を言えば私と夫とで半々に分担したいと思います。」(アムラ, 29 歳, 専業主婦)。

「家事は全て私が取り仕切っています。週25時間から30時間は家事に費やしています。誰も手伝ってくれる者は居ません。家事は女の第2の仕事ということだと私も思います。だって、夫は家事を仕事とは見なしていないのですから。子育ても私がやっています。家事も子育ても、理想を言えば夫と妻とが分担しあうのが良いと思いますけれど。」(アジザ, 28 歳, 縫製工)。

「家事をするのは全て私です。買い物を除いてね。週に20時間から24時間は家事に費やしています。誰かに手伝って貰うということは基本的にありません。『家事は女の第2の仕事だ』という言い方は、差別だと思います。子育ても基本的に私です。夫は2カ所で仕事をしているということがありますから。家事も育児も、夫と妻とが分担したいものだと思います。でも、状況によって出来ないこともあります」(ザリナ, 30 歳, ホテル客室係)。

「私が家でするのは家事と子育てです。夫は買い物をします。家事は夫も手伝ってくれま

す。家事は女性の第2の仕事という言い方には賛成出来ません。家事は夫婦2人の仕事でなければならないと思います。うちでは子育ては夫婦2人でやっています。仕事がなく時間があるような時、夫がしますから。家事も育児も、2人ですべきものだと私は思います」(マヒナ、23歳、専業主婦)。

「家事については、私の隣に住んでいる娘が週に20-25時間してくれていいです。娘が手伝ってくれていますが、夫もするのが当然だと思っています。家事は女性の第2の仕事ですが、これが差別だとは思いません。理想は夫婦2人ですることです」。(シャホダト、44歳、パン屋経営)

更に、家事の中でも、育児について夫婦間の分業の必要性を強調していると思われる見解を掲げる。

「女性の仕事と見なされるような家事は全て家では私がしています。週ですと20時間くらいかかっています。夫は家畜の世話をしてくれる程度です。家事は女性の第2の仕事だと思っています。別にこういう言い方が差別だとは思いません。子育てについては夫婦2人ともが一緒にやっていることで、私だけではありません」。(アクバロイ、57歳、パン屋勤務)。

「家では私は孫の面倒を見ています。家事は嫁がしてくれます。たまに、2-3時間くらい、私が嫁を手伝うことがあります。家事は嫁と2人でしているわけです。家事は女性の第2の仕事です。教育レベルの高い女性は、その能力を社会に還元しなくてははいけません。これは差別ではありません。子育ては、可能な限り夫婦一緒にすべきだと思います。子育ても家事も、夫婦は一緒にやって、助け合わなければなりません」(ディルバル、52歳、コック)。

「私自身が家事にかけている時間は1日4時間とか5時間です。家事は姑が手伝ってくれますね。女性にとって家事が第2の仕事であるということは別に差別でもないと思います。育児に関しては私がしていますが、姑が手伝ってくれます。理想としては夫婦が助け合っていることがいいと思います。平和的に家庭のことを解決すればいいのではと思っています。」(ガヴハロイ、22歳、専業主婦)。

「家事や育児にかかる時間はだいたい週に36時間くらいです。家事が女性の第2の仕事であるということが差別だとは思いません。女性はどちらにしても働くでしょう。子育ては私がしていますが、理想としては2人で子育てをすることですね」。(マジナ、26歳、専業主婦)

「私自身が家事にかけている時間は1日3-4時間で、家事全般をします。家事は女性の第1の仕事であって、2番目ではありませんよ。家事をするのは女性の義務だと思います。育児に関しては女性だけの仕事だとは思いません。夫は家庭を養わなければならないのですが、可能なら子育てをすべきだと思います」(マヴズナ、30歳、生産管理技師)

繰り返し言及している、筆者が以前行った旧ソ連のジェンダー意識の調査でも、ロシア・グルジアそしてウズベキスタンにおいても全体の傾向としては、「家事は女性の仕事」であると見なし、しかし同時に「育児は夫と分担するもの」であるとしている¹⁸。タジキスタンもこれと同じパターンを見せているものと思われる。

このように、妻が家事・育児を担う存在であると見なす女性と、理想としては家事・育児は男女で分担することが良いと見なしている女性と、の両方が存在する。どちらにしても実際には、家事、育児の多くを女性が担っていると推測される。特に家事については「買い物」以外は女性が行っているのである。

以上見てきたとおり、タジキスタン社会では、女性も男性と同様に就業しており、さらに家事・育児のほとんどを女性が担っている。しかし、家事を軽減する電化製品の普及率は低い。つまり、女性の2重の負担(仕事と家事)を負っているという状況がある。専業主婦の場合でも、家事に多くの時間が費やされていることが示唆される。こうした指標からも、ワーク・ライフ・バランス社会の実現は当面考え難く、その道は遠いものと思わざるを得ない。

4. 夫は家庭の主という規範:大規模マイクロデータによる検証

既に見てきたように、タジキスタンにおけるワーク・ライフ・バランスの実現の可能性は依然として低い、それを阻んでいる要因として伝統的な価値観があるのではないと思われる。

1917年の革命以前の中央アジア女性のおかれていた状況は、「ウズベック人、タジク人、トルクメン人の男性はロシア帝国の資本家の奴隷だったが、ウズベック人、タジク人、トルクメン人の女性は、その奴隷の奴隷であった」と記されているように過酷なものであったとされる¹⁹。

ソビエト政権は中央アジアの近代化を押し進めたが、その中で「女性解放運動」は大きな柱の1つであった。まず、シャリーアやアダートに替えて、ソビエト法を行き渡らせることが必要であった²⁰。

ソビエト政府は女性を組織し、教育活動を大規模に展開した。1919年に共産党の婦人部が組織され、『労働婦人』や『農業婦人』といった女性誌が発行される²¹。同年秋に婦人部は大規模な政

¹⁸ 五十嵐(2009) p.29.

¹⁹ Астанова(1977), p.126.

²⁰ Тюрин(1962), p.5.

²¹ Гишкин(1995), p.162.

治・教育運動を中央アジアの女性に対して行い、婦人クラブや文化啓蒙談話室を創った。中央アジアの女性は今までの生活と異なるものを受け入れたという²²。

しかし、女性が職場へ進出しようが、ベールをかぶらなくなろうが、家庭の中での主が夫であるという構造は変わってはいないという状況もあり得るように思われる。タジキスタン教育アカデミー総裁へのインタビューによれば、タジキスタンにおいてもジェンダー教育への取り組みが進められているが(本稿末尾第5節参照)、それでも夫が家庭の稼ぎで手であり、夫であるという伝統的な価値観は綿々と続いているようである。

これに関連して、ヴァルゾプ区役所イデオロギー担当ラジャボヴァ S.S.氏(40 歳代女性) に対して行ったインタビュー²³では、タジクの家庭について次のように述べている。

「タジク民族の伝統では、家族の中心は男性である。男性が一家の稼ぎ手であるのが自然なことであった。しかし、経済的な理由により、ここ 10 年で女性も仕事をするようになり、ジェンダーの状況は変化してきている。ソ連時代は、タジク女性は多産で、少なくとも 6~7 人の子供を産み育てていた。従って、働く女性は少なかった。かつて私たちの地区では女性の 25%のみが働いていた」。

「私たちの地区では、どのような職場でも管理職の半分は女性である。しかし、女性が仕事をするようになり、職場で高いポストに就くようになっても家庭の中では夫が中心である。例えば、私は職場では高いポストについているが、家庭に帰ると、主は夫である。夫の意見は私たちの家庭では法律に等しい。これはどの家庭でも同じだ。女性も男性も働いており、社会では男女平等だ。でも家庭の中の主は夫である」。

女性が社会で男性と同様に仕事をしている中であっても、家庭では夫が主であるのが当たり前となっていると言う。しかしながら、夫が主であるとしても、民主的な一面もうかがえる。例えば子供の数を決めるのは夫ではなく、夫婦で決めている、と答えている女性が多い。我々が実施した 40 名へのサーベイ中、「子供の数は夫が決めた」と答えた人は、わずか 4 人に過ぎなかったのである²⁴。

家庭内の権力関係、男女の関係は微妙な問題であり、慎重なアプローチが要されることは言うまでもない。今回我々が行ったサーベイでは男女関係にまで立ち入った検討を行うことは出来なかった²⁵。そこで、ここまで得られてきた知見を補強するべく、UNICEF が実施した大規模サンプリ

²² Тюрин (1962), p.6.

²³ 2010 年 8 月 17 日タジキスタン共和国・ドゥシャンベ市郊外にて聞き取り。

²⁴ 「子供を何人作るか、ということを決めたのは夫です」(ディロヴァル, 31 歳, 技術者); 「子供の数を決めたのは主に夫でした」(アムラ, 29 歳, 専業主婦); 「子供の数を決めたのは元夫でした」(チュマグル, 22 歳, 縫製工); 「子供を何人作るかということを決めたのは夫です」(モヒラ, 30 歳, 専業主婦)

²⁵ 実際にそうした質問項目を用意し尋ねるということを行ったが、明らかに回答が忌避されてしまっており、利用可能ではなかった。

ング調査である Multiple Indicator Cluster Surveys (MICS) を用いて検討を進めたい²⁶。

MICS は 1999 年・2005 年を中心に実施されている²⁷、子供及び女性を対象とした繰り返しクロスセクションの個人対象マイクロサーベイである。子供の健康状態・女性のリプロダクティブヘルス等の調査を目的としたもので、旧ソ連圏では中央アジア 5 カ国及びウクライナ・ベラルーシ・グルジア等において実施されている。タジキスタンの場合、直近で利用可能なものは 2005 年に実施された調査であり、そのマイクロデータを用いる。再生産年齢にある女性のサンプル数は 6,245 人である。全国的代表性を担保しており、かつ地域レベルでも代表性を維持している。

4. 1 出産抑制手段

MICS のデータから、まずは出産抑制手段の選択に関する回答の集計を行う。タジキスタンに限らず旧ソ連諸国では、採られてきた避妊手段は伝統的に子宮内避妊用具 (IUD) が圧倒的に多い。表5にはタジキスタン MICS Round 3 (2005 年実施) により得られた避妊手段に関する回答のみを取り上げるが、この状況は他の旧ソ連諸国、即ちウクライナ・キルギス・カザフスタン等の MICS Round 3 による結果でも同じである。

ソ連時代から男性用避妊具やピルに比べて、IUD がより多く使用されてきたことが、先行研究により指摘されている²⁸。男性用避妊具は、質・量ともに問題があるために旧ソ連ではあまり使用されず、IUD を病院で既婚女性に装着していた²⁹。この避妊方法についても、男性が避妊することを嫌がる状況下、望まない妊娠を避けるために女性が選択していたということである³⁰。

リプロダクティブ・ヘルス・ライツという観点から見ると、女性が IUD 装着をしているという事実が、「産む・産まないは女性の自己決定」という状況がタジキスタンで実現されているということを意味するのであれば、それはリプロダクティブ・ライツが実現しているとも言えるのかも知れない。しかしながらそうではなく、夫に服従している女性がいつでも夫からの要求に応えることが出来るように、ととってきた苦肉の策であれば状況は全く異なったものとなる。ロシア人へのインタビュー調査では、男性が他の避妊手段の採用を嫌がるために、望まない妊娠を避けるべく IUD を装着する女性が多かったという声がある³¹。この事情はタジキスタンでも同様であったと思われる。このことは、次に見る家庭内暴力に対する認識に関する質問項目に対する回答からも、ある程度伺われるのである。

²⁶ MICS のサーベイデザイン については http://www.childinfo.org/mics3_surveys.html に詳しい。マイクロデータを提供してくれた UNICEF に感謝する。

²⁷ 国により、2000 年または 2006 年に実施されている場合もある。

²⁸ <http://demoscope.ru/weekly/2003/0123/analit02.php>; David P. H, Reichenbach L., Savelieva I., Vartaperova N. and Potemkina R. (2007).; Visser A.Ph., Pavlenko I., Remmenick L., Bruyniks N. and Lehert P. (1993).

²⁹ <http://demoscope.ru/weekly/2003/0123/analit02.php>.

³⁰ Темкина(2008), p.125.

³¹ 2011 年 3 月 8 日 スミルノワ, T.B.(ロシア連邦・サンクトペテルブルク市在住 60 歳代女性) への聞き取り。

表5 利用している避妊手段:タジキスタンの場合(%)

| | 避妊せず | 女性不妊手術 | 男性不妊手術 | ピル | 子宮内避妊具(IUD) | 避妊注射 | 皮下埋込型避妊具(インプラント) | 男性避妊具 | 女性避妊具 | ゼリー | 授乳による避妊(LAM) | 周期的禁欲法 | 性交中絶 |
|-------------|------|--------|--------|-----|-------------|------|------------------|-------|-------|-----|--------------|--------|------|
| 領域 | | | | | | | | | | | | | |
| ドゥシャンベ | 62.3 | 0.4 | - | 3.5 | 29.4 | 0.6 | - | 1.9 | - | - | 1 | 0.5 | 0.2 |
| ハトロン | 64.9 | 0.3 | - | 1.9 | 24.3 | 3.8 | 0.1 | 0.6 | - | - | 3.8 | - | 0.3 |
| ソグド | 53.7 | 0.7 | 1 | 2.4 | 28.2 | 2 | - | 2.7 | - | - | 4.9 | 0.5 | 3.7 |
| 共和国直轄地 | 71.1 | - | - | 1.1 | 24.8 | 1.6 | - | 0.6 | 0.1 | 0.2 | 0.3 | 0.3 | - |
| 山岳バタフシャン | 60.8 | - | - | 3.4 | 31.1 | 3.7 | - | 0.8 | - | 0.3 | - | - | - |
| 地域 | | | | | | | | | | | | | |
| 都市部 | 57.6 | 0.6 | - | 2.7 | 29.8 | 2 | 0.1 | 2.7 | - | - | 1.7 | 0.7 | 1.7 |
| 農村部 | 63.7 | 0.3 | 0.5 | 1.8 | 25 | 2.6 | - | 0.9 | - | 0.1 | 3.6 | 0.1 | 1.3 |
| 教育水準 | | | | | | | | | | | | | |
| 無し | 86.1 | - | - | 2 | 4.9 | 0.5 | - | - | - | - | 6.4 | - | - |
| 初等 | 75.3 | - | - | - | 13.2 | 2.6 | - | - | - | - | 7.1 | - | 1.8 |
| 不完全中等 | 70.1 | 0.5 | 0.1 | 1.7 | 20.7 | 1.5 | - | 1 | - | 0.1 | 3.3 | 0.2 | 0.6 |
| 完全中等 | 61 | 0.3 | 0.5 | 1.8 | 27.6 | 2.7 | - | 1.2 | - | - | 2.9 | 0.3 | 1.6 |
| 中等特別 | 53 | 0.8 | - | 2.8 | 32.8 | 3.1 | - | 1 | - | - | 3.6 | 0.4 | 2.6 |
| 高等 | 49.3 | 0.6 | - | 5.2 | 31.8 | 1.9 | 0.5 | 6 | 0.3 | - | 0.5 | 1.1 | 1.3 |

出所:MICS 3 より筆者算出。サンプルは 6,245 人の再生産年齢(15~49 歳)の女性。

4. 2 家庭内の権力関係:家庭内暴力

更に, MICS データに基づき, 家庭内での暴力行為に対する認識を見てみよう。この回答を見るに, タジキスタンの女性の人権は著しく侵害されているという状況があり得るのではないかとと思われるのである。

「夫が妻を叩いても仕方がないのはどのような時か」という質問に対して, 「妻が夫に黙って出かけたとき」「妻が子供を放置したとき」「妻が夫に文句を言ったとき」「妻が性交渉を拒んだとき」「妻が料理を焦がしたとき」というそれぞれの状況について尋ねた回答をまとめたのが表6である。比較対象のために, 他の旧ソ連の国々のデータも示す(表7)。

これらのデータは共に, 2005 年あるいは 2006 年に各国で実施された MICS Round 3 による結果である。これを見るとタジキスタンにおいては, 家庭内暴力が家庭内暴力として認知されておらず, 妻の家庭内での置かれている状況が強く示唆される。同じ中央アジアのカザフスタンでは, (キリスト教圏である)グルジアと同様に, 「夫に叩かれても仕方がない」とする一連の比率は遙かに低い。キルギスでのその比率はタジキスタンほど高くはないが, カザフスタンと比べると家庭内暴力を容認している状況にある。先の避妊の箇所に戻って見ると, IUD の使用は女性のリプロダクティブ・ライツを保障しているという訳ではなく, むしろ夫の身勝手な性交渉に対する自己防衛とも考えられるのであり, 夫婦が話し合っ IUD を使用しているとは考えにくい。タジキスタンでは, 他の旧ソ連諸国に比べて, 夫は家庭の中での絶対的な権力を握っているという状況が想定され得るのである。

表6 「夫が妻を叩いても仕方がないのはどのような時か」:

タジキスタンの場合(%, 複数回答可)

| | 夫に黙って 出かけた時 | 妻が子供を 放置した時 | 夫に文句を 言った時 | 性交渉を拒 否した時 | 料理を焦 がした時 |
|-------------|----------------|----------------|---------------|---------------|--------------|
| 領域 | | | | | |
| ドゥシャンベ | 39.7 | 29.4 | 40.6 | 28.5 | 28.6 |
| ハトロン | 66.1 | 65.2 | 76.8 | 57.6 | 47.7 |
| ソグド | 66.4 | 62.5 | 69.6 | 43.2 | 44.0 |
| 共和国直轄地 | 60.2 | 62.2 | 64.0 | 49.1 | 42.7 |
| 山岳パタフシャン | 52.4 | 56.9 | 56.0 | 38.4 | 45.8 |
| 地域 | | | | | |
| 都市部 | 53.0 | 50.8 | 60.1 | 38.9 | 36.7 |
| 農村部 | 66.0 | 64.2 | 71.1 | 51.3 | 46.4 |
| 教育水準 | | | | | |
| 無し | 71.8 | 70.5 | 78.4 | 49.0 | 43.4 |
| 初等 | 74.9 | 70.9 | 82.9 | 62.6 | 58.0 |
| 不完全中等 | 66.3 | 64.3 | 72.0 | 53.8 | 46.3 |
| 完全中等 | 65.0 | 63.5 | 70.1 | 49.4 | 46.0 |
| 中等特別 | 54.3 | 47.7 | 59.8 | 37.7 | 34.6 |
| 高等 | 28.9 | 28.6 | 38.0 | 21.1 | 19.8 |

出所: MICS 3 より筆者算出. サンプルは 6,245 人の再生産年齢女性.

表7 「夫が妻を叩いても仕方がないのはどのような時か」:

その他旧ソ連諸国の場合(%, 複数回答可)

| | | 夫に黙って 出かけた時 | 妻が子供を 放置した時 | 夫に文句を 言った時 | 性交渉を拒 否した時 | 料理を焦 がした時 |
|--------|-----|----------------|----------------|---------------|---------------|--------------|
| キルギス | 都市部 | 13.1 | 17.1 | 14.5 | 6.5 | 6.1 |
| | 農村部 | 26.3 | 26.4 | 34 | 11.7 | 15.4 |
| カザフスタン | 都市部 | 2.5 | 7 | 4.2 | 1.5 | 1.9 |
| | 農村部 | 2.4 | 7.3 | 4.4 | 1.7 | 1.7 |
| グルジア | 都市部 | 1.3 | 4.5 | 1.5 | 1 | 0.7 |
| | 農村部 | 2.4 | 7.5 | 3.5 | 1.7 | 1.5 |

出所: MICS 3 より筆者算出.

しかしながらここで、表6のクロスデータのうち、教育水準による回答の相違に注目したい。タジキスタンにおいても全ての事由で、教育水準が高ければ高いほど、夫からの暴力行為を許容する割合が低いという明確な相関を看取出来る。これが一般化可能でありかつ直接的な因果関係を有するものであるとすれば、タジキスタンという土地においても、教育レベルの上昇が女性の家庭内における位置を大きく変え得る、ということを描き出すべきであろう。

5. 結語にかえて:タジキスタンにおけるジェンダー教育

タジキスタンの教育アカデミーはジェンダー教育を導入している³²。教育アカデミーでは、教育におけるジェンダーについて調査・分析するために 2009 年に情報調査センターを設立した。センターでは、タジキスタンの義務教育の全科目の教科書と教育プログラムを収集し、ジェンダー・センシビリティの観点から検討している。教科書の内容だけではなく、教科書に挿入されているイラストにも注意を払っている。例えば、女性だけが料理をしている挿絵が使われていないか、仕事をしている写真に写っているのは男性だけになっていないか、といったことに留意するのである。これらの分析をまとめた『教育におけるジェンダー監査』という論集も出版している。

現在は、男女で「技術・家庭」の科目を分けているが、これを統一することも検討しているという。これには反発もあるが、タジキスタンのジェンダー教育において大きな前進となるのではないかと期待をかけているようである。

センターの今後の課題は、学校における男女のステレオタイプを壊すこと、両親のジェンダー教育に力をいれることであると言う。しかしながら同時に教育アカデミー総裁は、次のように強調する。

「男女のステレオタイプを壊しても、タジク民族のメンタリティーを忘れてはいけない。これは何世紀にもわたり培われてきたものであり、良いものまで壊してしまっはいけない。ヨーロッパで受け入れられても、中央アジアでは受け入れられないものもある。つまり、壊さないほうがよいもの・変えないほうがよいものもある。女性は、女性的であるべきだ。各女性が家庭での自分の役割は決めれば良い」

ジェンダー教育も開始され、技術・家庭の男女共通プログラムの導入など、ジェンダーに対する取り組みが始まっている。しかし、技術・家庭科の共通プログラムは、男女の役割分担の解消を目指したものであり、タジキスタンの伝統に矛盾しているために、社会からの反発も予想される。ジェンダー問題に取り組んでいる総裁自身でさえ、壊さないほうがよいタジキスタンの伝統を保持すべきだという意見を持っており、簡単にジェンダー状況は変わらないであろう。特に、家庭の中での男性優位の構造は簡単には変わらないであろうし、大きく変えようとする動きは今後も出てこないのではないと思われる。

家庭内における男女の役割分担については、タジキスタンでは明らかに、家事・育児は女性の仕事、というのが自然なことであり、女性が家事・育児を担っていくであろう。これは夫の家庭内での権力とも関係している。つまりワーク・ライフ・バランスの実現は簡単なことではない。しかし、タジキスタンをはじめとした旧ソ連諸国のイスラム社会は、他のイスラム社会と比較すると特徴的な要素も持っている。それは、女性の高い識字率、就業率、そしてある程度の男女平等の達成である(旧

³² 以下、本節の記述は 2010 年 8 月 19 日におけるカリモヴァ・タジキスタン教育アカデミー総裁に対して同氏のオフィスで行った聞き取り等に依拠するものである。

ソ連諸国のイスラム社会も一様ではないが). こうした国をネーミングすれば, 『旧ソ連型イスラム社会』とでもなるのかもしれない. 今後, この旧ソ連型イスラム社会が経済状況の動向に伴ってどのように変化していくのか注視する必要がある.

参考文献

五十嵐徳子(1998), 「ロシア人女性の労働と家庭に関する意識状況—サンクト・ペテルブルグでの調査を中心に—」, 『ロシア・東欧学会年報』, 第 25 号.

五十嵐徳子(2009), 「旧ソ連の共和国で大量の専業主婦は誕生するのか」, 『比較経済研究』, 第 46 巻第 1 号, 比較経済体制学会, pp.17-34.

雲和広(2011), 「タジキスタンの国際労働移民と外国送金: タジク移民は貧困削減的吗?」, 『経済研究』, 第 61 巻第 2 号, pp.113-128.

黒崎卓(2006), 『貧困と脆弱性の経済分析』, 珪草書房.

David P. H, Reichenbach L., Savelieva I., Vartaperova N. and Potemkina R. (2007), Women's Reproductive Health Needs in Russia: What can We Learn from an Intervention to Improve Post-Abortion Care?, *Health Policy and planning*, vol.22, no.2, pp.83-94.

Lubin, N. (1981), Women in Soviet Central Asia: Progress and Contradictions, *Soviet Studies*, vol.33, No.2, pp.183-186.

Pockney, B.P. (1991), *The Soviet Statistics since 1950*, Great Britain, pp.48-49.

Visser A.Ph., Pavlenko I., Remmenick L., Bruyniks N. and Lehert P. (1993), Contraceptive Practice and Attitudes in Former Soviet, *Women Advances in Contraception*, vol.9, no.1, p.13-23,

World Bank (2009), *Republic of Tajikistan Poverty Assessment*, Report No.51341-TJ, World Bank.

Астанова, Г. (1977), О положении женщин в Бухаранском ханстве в конце XIX - начале XX в.// Женщины востока. Ташкент.

Вестник статистики, №1, 1992, ст.63

Олимова С., Куддусов Д. (2007), Семья мигрантов в Таджикистане: проблемы и способы их решения. Душанбе.

Содружество независимых государств в 1996 году (1997), М.

Содружество независимых государств в 2003 году (2004), М.

Содружество независимых государств в 2009 году (2010), М.

Темкика А.А.(2008), Сексуальная жизнь женщины: между подчинением и свободой.СПБ.

Тишкин, Г.А. (1995), Женский вопрос в истории России, Феминизм и российская культура СПб., С. 138-167.

Тюрин, К.Д. (1962), Формирование Советской семьи в Узбекистане, Ташкент.